



畫本西遊全傳

編

六



八遠21
2500
40-26



門 遠 21
2500
40-26

畫本西遊全傳

繪本西遊記二編卷之六

岳亭丘山譯

諸神逢毒手

彌勒傳妖魔

油漬



斯て行者の筋斗雲お打棄て南瞻部洲の武當山にお歸着座を
 下して二天門を過て太和宮にお向ふ處お一人の靈官立出て何者ぞ
 問行者答て老孫の孫悟空といへる者なり天尊お見え奉り度
 々々ゆりて萬千の道と廢ど故意々々此処お奉りてと画示るを彼
 靈官裡へ入る天尊お斯とまきくは傷魔天尊是を地ぬの宮ぞ
 出て行者を迎て殿中お伴ひの互にお礼終つて後行者小雷音寺
 の妖怪が動靜を説と二編へ彼妖怪奇術ありて退治しつて願
 くの天尊力を助けのひて彼妖怪を亡しめりて深く是を感謝し奉
 る天尊問ひて大聖の頼こし那ぞ是を救はざらんや然りとて入

この帝王の尊慮を伺はる間、我は念ふ于戈の動いごとし思ふの
西方の小妖的、奈何程のまう有ん我自ら向ふもの及ぶべしと
が麾下小亀蛇二將軍五大竜神との有是は教千の精兵を添て
た聖を助しめん行者惟喜で拜謝すも天尊則ち亀蛇竜神は
の精兵を呼て你們是下り大聖に隨ひて小雷音寺に向ひ彼妖怪を
治はべしと命トあ人を衆位の神と命と受て行者と復れ打連て
雲よ打棄多き小雷音寺ふりしと雷の音を揚りしとが彼妖怪
門外に跳り出て衆位の神兵を見て喝々と打笑ひ向ふ那里の毛神
どもふて降据が助大刀とつらや多くの神達皆一同小叱て曰く我
是南瞻部洲武當山の混元教主首陽鹿天尊駕前の大將五位竜神
亀蛇二將軍あり唯今大聖の頼ありて爰に奉りて你們と復ん

疾く唐僧をとりめ衆位の目生宿天将们等を助け出せ然を你が一命を
助ん倘然とむんぞ乍ち微塵の切碎き冥途の妖怪とらばべきものと叫
つらぬ妖怪方の小憤、鬲狼牙棒を閃して打てめとば衆部の小妖的
皆一同ふ切てあくる神将亦も利針々々を差うごして行者も俱れ入
て半時をかり戦ひし彼妖怪の腰より搭包見を把出せと見え行
者の急ふ色を奪て衆位心と付らゆと未言も果らざる小妖怪は搭包
見と扱むけり神将亦も戦ひあ心ととらゆ何の意構もせざりし故又志
く搭包の中を装持りる行者の雲よ打棄文中小逃去つり妖怪を勝
を得て搭包をわげ寺中み候り小妖的小命も麻繩と取まらせし
竜神亀蛇二將軍をとり一人ひとり細縛て又空室の裡に打棄せし
此時行者の雲を下り山の上止り今奈何とも詮方なく口は官言を

流々惘然とて立ち上りて斯る處小西南の方より祥雲一群地小降
満山小濱紛と雲香薫下諸々の蒼を降し光明四方小輝きつる行
者驚き見是奈何と遙小是をみてあはれ是則ち弥勒菩薩なり行者
開りて跪下て拜する菩薩當今那里へ去るかや弥勒曰ふや我
爰小来り度小雷音寺の妖怪と收んが為なり彼妖怪の實ハ我身邊小
在り磬と司とじむる處の黃眉童子なり我三月三日元始天尊の方
へ卦きし時彼童子小空宮と看守置りしと思ひきや我後天袋子
と偷とり爰小来りて妖怪とるは彼搭包の後天袋子なり凡俗是を換
て人種代衣と名く他と持とるの狼牙棒則ち我磬を敲越り你小
師徒他う為小惱さる然も衆位の星宿天將諸神小やても扱へらと
と閉へる故小我爰小来りて退治せんとは行者拜伏して謝て曰く

佛相當今奈何して他を降伏しや弥勒笑て曰くわが我今法力
を以て此山の麓小一箇の草菴を頭へ又一箇の瓜を構へ許若の瓜
を作し置ん你へ去て妖怪と戦ひ勝負を求むて只他を此処まで
偽引まじ他口乾き瓜を見て嘗て喰んとせば我都て皆青瓜と見
置ん你早く逃まうて一箇の熟瓜とるり畑の中小轉ひ左を妖怪
必定是を把て喰みへ其時你他が腹の中小飛入て強く苦めると
我先彼宝貝と取返り其後唐僧をまじり衆位の天將亦も皆
救ひ出さんと曰ひくは行者惟喜此謀計極め妖怪然ととも
妖怪の遠く追まらざる時の心慮せん弥勒開のひ苦くかくは我
一箇の法ありとて行者が左の手に出させ菩薩右の薬指小口中の
神水をつゆく行者が掌裡小一箇の葉の字を書きひ汝よく是を握

了て行妖怪と戦ふ時此手を開きて他小見せむの妖怪前後を顧び
て只管小進来らん行者悟んで命を受左の手を堅く握り右の手
小鍔棒を取て山門小駈向ひ妖怪早く出て勝負をせよと大音小言
了々して彼妖怪くさんの搭包を腰につけ狼牙棒を打振て走り出女
當今謀計極り力尽て助けを求る一死多く駕まりて死を求る木よ
落るる落猴うると大の小朝と笑ひひらとを行者怒り心頭小登り返答
もろく打くかゞとを妖怪狼牙棒を廻して十余合戦ふ時行者彼左
のて手をひくき妖怪小見せ々の抑奈何る仔細ゆる左々の妖怪是
を見て大の小焦を管進んで更に止るは行者へより程小戦ひくの逃
走りたるを妖怪の搭包兎を投べき暇なく只管走つて追来る行者は彼
瓜畑の邊りを逃来り忽ち身を轉し跡を暗見しとるぬ妖怪行
者を見失ひ爰彼死と尋る間に行者の早く瓜畑小飛入て一箇の就が
る瓜と凌りて轉り居ると妖怪の行者を尋しども知らずのくさを
頭で彼草菴の邊りにふまりと急に呼ぶつと此瓜の誰が作らしるや弥
勤一人の老翁と変り菴の裡より立出しひ此瓜の我作らしるおきこ
ると有らぬが妖怪曰く殊の外口渴きて堪がずと氣をとる瓜あらぶ
我と與へて渴をとりて人を弥勤則ち行者が愛しる瓜を取て妖怪と與
へるの妖怪此瓜をとりて口を開き食んとする時行者が心を身を小さ
くして他が喉に飛入腹の中へ走り下り逆様に立ち或の踏ん返し
とり色々種々に舞ひ跳きるをば妖怪疼を堪がずの地頭に臥し轉
びて老父々々我を助けよと叫びくる時弥勤忽ち本像を現しひ
打笑ひて曰く汝我を認得らずや彼妖怪頭を牽きて菩薩を見て大

昔八百四十三回ハハ

いふ驚死身を振りし地小平卧吾主公万望改心ことを密多し我を救ひ
 つび多へと叱悲しむ弥勤立倚かの搭包児と磬を敲槌を奪把の
 悟空他が命を助て疾く出よと命ありらむとども行者の腹の中ふ在て
 猶も恨と暗がごととて鉄棒を拿て振廻く突廻くまゝ程の女
 怪の總身碎るむりみ疾く堪がごと口管小轉び廻りて手口を
 掙き苦まゝのぞ弥勤曰く悟空寂早宜くあぶく我小愛て集が
 命を助よと呼つて多人が行者聞て怒を今出べく女怪口を開けと喚
 まるる女怪聞より早く口を張開く行者乍ち踊り出て本相を現
 せ弥勤女怪を捕へて彼搭包の内小装持多しは汝金鏡を志度る
 かつらや妖怪袋の中ふ在て答て曰く金鏡の行者小打碎を當今
 取集めて寺中ふ有弥勤是を聞て搭包を肩小打りけ行者と去

連て寺内小到せり小衆部の小妖的大王が担らぬを悟り四方小
 て逃迷ふと行者まゝ廻りて悉く打殺しぬ斯て弥勤の碎けたる金
 鏡と一箇小集め真言を唱へ口より仙氣を噴くあへ彼金鏡一箇小堅うて元の
 如く小取全うま斯て弥勤の行者小別れを告めひ祥雲に乗じて帰る去りひけ
 此の行者の天に向ひて恩を拜謝し地窖を開けて三藏師徒を運び八宿五法掲諦
 龜蛇二将五竜神小皆悉く縛を解て救ひ出に左右して列位の天将星
 宿もち別を告て此百夫々の本郷小取り去りぬ三藏師徒四人の此
 寺小半日と休きて飯を作して食ひ終り頃て一把の火を放つて
 藍を悉く焼盡し尚西方小向ひて急心せたり
 極救陀羅禅性穩 脱離汚穢道心清
 三藏師徒の小雷音寺を離れてより一月余りを經て一箇の高山の

杖ふ刺り日も西へ傾くころ三藏馬より下て宿を借んと見渡りあへ
を一邊ふ一箇の民家有て柴の庵を闌しつゝ三藏立倚て門を敲き
ぬくを裡より答をうて門を開き一人の老人手ふ藜の杖を突て出
迎ひ何人あるぞと向三藏合掌して貧僧へ東土大唐より西天ふおき
佛を拜し経を求るの僧なり今貴地ふ到りて天晚ふ及ぶ万望の老人念
悲を垂らひて一宿を恵り老人問て諸の遙々の道を越て能てま
らせぬひらき此地方へ小西天の内ゆて陀羅莊と唱はるる某今
宵の尊宿を勸むべし旦此方へぬくとて師徒四人を堂上小請り互
小禮終つて後老人三藏に向ひ唐長老遠く交友をて来ぬ人も此先
決して進がらう三藏驚て其仔細を問多人を老人が曰く此地方小
一箇の山あり号して七絶山とり山中悉く柿木ゆて余木一株もな

山直ふ行更八百里ふて此處より二十里の行程あり抑柿ふ七絶あり
第一其木壽長第二小陰多第三小鳥の果を食まき第四小虫
第五小霜葉亂ふ第六小其實を喜ぶ第七落葉肥大ゆて
字と書目べ彼山余木一根もなう八百里が間皆柿木をうりうれを七
絶山とい号しつゝ此山過らうとりのめい女年小満山の柿其實を
山中小積つて又別山をさし雨露霜雪ふ叩て朽腐して穢しきもの
と成り俗唱で柿屎術と云すこ陶東圖とも云うり時今二月其
臭氣悪きふい及ぶべらうと雖も然れども八百里が間都て斯の
如くする其故小往昔より彼山を越らう人多し長老西天小行ゆふの
外小行べき道なり我是を以て其進之難きを畫するの爰迄まの多し
辛苦仇吉とらうの残るると難由疾く東土へ歸せらふべし是を以て



會本古史言三



終本古史言三

三藏煩悶として不言口管涙を流しし忍みて行者老人小向ひ
高呼で曰く汝宿を借ば貸さずの責めを止む那ぞ種々の慢言を吐
出して我師父を驚かすや老人行者が客の元悪るるを見て心中頗る
驚くと雖態と胸を居て吐て曰く此癆病鬼怎生老人小對ひて無
禮の言を吐出せしや行者笑て曰く老人眼有るも珠あり我相貌の醜
きを侮りて癆病鬼と嘲る我形斯の如くありと雖も法力廣大の
て常小悪鬼を降伏して妖怪を拿ゆる責を得り老人是を聞て
急小怒りを返して憤り家僮を呼んで茶を捧げ齋を齎し万般と接
待行者小向ひ當下長老よく妖怪を捉る責を得りとい曰く我此地方
小箇の妖怪あり若星を退治しつゝ管に重く礼謝せしや行者曰く
此地邊清平ゆて又人家も立籠り那の妖怪有て祟りを為や老

人が曰く此地方久く安穩なりし三年前六月の初忽然一陣の狂風
奔り那時人家甚忙しき時候めて麦を打的の場上小有秋を挿的の
田裡小右忙きふ幼心も付ど唯天変とのと思ひし知小豈計んや秘
狂風過る處一箇の妖怪在て人家小牧とろの牛馬猪羊雞鵝の類を
合手食ひ男女の嫌ひつゝ活吞ふらる自後後常あまわすを害するは
と行者聞て此地方の人志意分散あして齋いざると見えたり若然はを
那ぞ家毎の銀を集めて數百金とす法カ有僧を頼きて銀を謝物
とて七妖怪を捉へざるを老人が曰く汝の云る如く我此莊小家數五
百家有家毎小三五兩づの銀を集め一年山の南より一個の和尚を
請まの銀を與へて妖怪を合手させんとせし彼和尚些少も法力多光
顯上を妖怪打して西風の爛れたる如く終小命を失ひし我れ又

虧を吃ひ他が為ぬ棺を買葬礼と管と又他が金子達ゆの銀と與へ
 こつふ彼金子どもの尚も欲心歇はく又告快小及んと於今今乾浄と
 不濟然るゆ昔年又一個の道士を請まり銀子を與へ妖怪を合手んと
 為知ぬ彼道士今牌を響くと法術を遣ひ妖怪と相特闘ぬ天明ぬ
 到り我れども行て見れども計ども彼同士漢水の中ぬ滄一殺とこつ徐
 今此妖怪と退治ぬめつ我箇莊中の長者を請まり你れ我れ文書を
 交易し若妖怪と退治せば汝の要るゆ憑ひ多少の銀子めて贈るべ
 倘又你妖怪ぬ負て命を失ひつ共外の徒芽亦迹めて圖頼事ある
 也互小天命ぬ任まべし行者朝笑て曰く你無能の人を頼と頼へ圖頼
 ぬもくも夫ぬ怕氣付て文書を求るや我れ那様の者ぬ非だ早ぬ彼長
 者どものを呼まを彼老人大いぬ惟喜家僕ぬ命とて八九位の長者を請

まる個々三藏師徒ぬ見え妖怪と合手るを問衆老惟喜も又限りるし
 借何どの師徒り妖怪を合手ぬめし行者進と出て老孫ぬ候とりの衆
 位の長者是を見て不濟々々彼妖怪神通廣大ゆして身體抵抗り汝
 斯の如く丈依く然も疲る妖怪が齒の間ぬ挟むぬも不豆るん行
 者曰く我生質疲て小分とりのども秀気自ら中ぬ有那ぞ妖精を怖んや
 長者の曰く然るゆ你妖怪と退治すゆなな何の謝銀を要るし行者
 問て我れらの後を積和尚の志生謝銀を要んや唯是二哭品の茶二鉢の
 飯則ち礼謝とさるぬ豆の衆位の長者是を聞て俄ぬ拜謝して惟
 喜とこつぬ忽然とて二陣の狂風吹まる彼長者們大いぬ驚死借ハ
 妖怪まふると戦々兢兢々天を地へと騒動と主の老人急ぬ腰刀を開
 きて家内の男女早くまきと三藏中を呼集め妖怪既ぬまふると呼び

立ち八戒悟浄も説得驚き逃入んと為死を行者急ぎ扯住め汝も逃る
 道理を我門の身とて長摩内外を分さる爰小在て俱ふ奈何
 様の妖精やらん伺へて八戒悟浄没奈何怕々住して居り斯て彼陣
 風過る處隠々として半空中小兩盞の燈光頭出ると八戒見を見て大
 小笑て能慰々々此妖怪管は有行正のめらるん悟浄聞て其鼓を向
 八戒が曰く汝聞むや古より云る夏あり夜行以燭無燭則止と那着
 一對の燈籠を以て先達て来る必定悪き者小のあはじ悟浄が曰く汝
 過る那の是燈籠小の非は妖精が兩隻の眼の光なり八戒三す計り
 縮こまり怕怖や眼斯の如く口の大いさ計り知べらば行きて
 能々汝を師父を大節守護まぶ我空中小到り得と見届まらん
 とて鏡棒を推把て空中小飛升と汝那願うのを爰小まの人家小災

害をもちや其名をのれと呼つとれども妖怪更小答をさき長鏡
 を振廻し行者小向ひて戦んとは行者の兩三度色をかくと妖怪
 ら小一言を應じ只管鎧を閃せを行者笑て汝の事るら啞るら好々
 我鉄棒を吃へとて兩個空中小在て戦ふ夏半時をかり八戒家小在
 空中を伺ひ見ると小彼妖怪遮架小の計りて行者を責討とせは
 八戒悟浄小向ひ汝の爰小在る師父を守れ我戦ひを助けて妖怪を打
 殺ん急摩手を空くして振め小独高名させんやと雲を登り飛升つて釘
 鉈を以て突てかくと妖怪又一條の鎧をつらひ兩手小二條の鎧を以て
 行者と八戒小戦合八戒見を見て此妖怪更小鎧の妙手なりと云は行
 者が曰く他更小言ひて未だ人道小返さるて陰氣遅きめのと見
 と怕る天明小到り陽氣増る時小到り管に逃まると夏まらん甘ん時

管と道とへくくむ八戒心得りて云て又多時戦ひたり既小東方発白
 の頃小いり妖怪頭廻て逃しるるを行者八戒迹小続て追行く小忽
 ち悪身八人を襲ふ是則ち七絶山稀柿術の八戒の堪ふて是奈何真
 正 是れ 那里の洵毛測るるや行者聞て汝乱話を云とるるを真を塞
 き口早く追駈よと終小山を馳過る頃妖怪忽ち本相を現したる行者
 八戒是を見小是一條の紅鱗の大鱗の巨口を聞き兩個を呑んと劈
 ひよる行者進んで近くと見し唯一口小吞とる八戒敬馬き逃走り大
 の小叫びて泣悲む行者妖怪が肚の裡小在て大音小呼て曰く八戒々々
 々管む敬馬く是なるは我今這廝を船小して見へとて肚の裡小在る
 鉄棒を把出く青小押當力小任せて推付しを彼大鱗甚しく疼き苦
 る頭と尾先を空ふる恰も一般の船の形小似る八戒是を見て大い

小安堵く大奇々々能船小似りと雖も挽送りての眉を使ふ小好し
 々々行者是を聞て等々我今帆柱を造り風を使んとく鉄棒を推
 取のへ背骨小押當突上れを皮肉の間を差貫き高く登る是五七丈
 あり寔の船の桅杆の如く大鱗疼き苦き又原の道へ攏り廻りて下
 りたる唯風帆の船をまきしるが如漸々小山を下る是廿五里終小鳴
 呼て死しるる行者鉄棒小て二方を突破り此穴より潜り出八戒と兩個
 小て尾先を取て扯拏飯る却説駝羅莊の長者とちの彼老人が家小
 集り此兩人の和尚達由又妖怪の為小殺されんと衆と衆と煙ひ居と
 ころ小次の朝小到りて行者と八戒方りる鱗を扯拏て飯り煮りけ
 ちを衆位の老人とちを初とて一莊中の男女老少都て皆集りまきり
 彼大鱗を見て跪下て行者を拜し當下長老此妖怪を除きて我れら



繪本西遊記三編



村中老若
看妖怪

繪本西遊記三編

董生と安んぢるを^と得^える何^なを以^もて^り此^この^の大^{おほ}い^い恩^{おん}を報^はん^んと^と夫^その^の口^{くち}に
嘗^た小^こ待^{まち}管^{くだん}つ^つ五^ご七^{しち}日^{にち}留^{とど}め^める^るも^もの^の三^{さん}藏^{ざう}師^し徒^と堅^かく^く辞^じして^て竟^{つひ}小^こ別^{べつ}と
く立^た出^でる^る衆^{しゆ}位^ゐの老^{らう}者^{じゆ}ら^らち^ち金^{きん}銀^{ぎん}を贈^くじ^じも^も更^{さら}小^こ受^うぢ^ぢれ^れを^を没^{ぼつ}奈^な何^{なに}
只^{ただ}乾^{かん}粮^{りやう}菓^か品^{ひん}の類^{るい}を贈^くて^て餞^{せん}別^{べつ}と^と個^こ々^々遠^{とほ}く送^{おく}り^りま^まる^る終^{まつ}ふ^ふ七^{しち}絶^{たつ}山^{さん}
小^{ちゆう}近^{じん}き^きら^らむ^むを^を其^{その}の^の西^{さい}心^{しん}真^ま自^じ鼻^びを穿^うて^て堪^たべ^べら^らく^く路^ろ徑^{けい}の^の皆^{みな}埋^うめ^めて^て通^{とほ}る^る
三^{さん}藏^{ざう}行^{ぎやう}者^{じや}を招^{まね}き^き此^この^の山^{さん}鳥^{ちゆう}廢^{はい}して^て越^こへ^へら^らん^んや^や行^{ぎやう}者^{じや}鼻^びを覆^{おほ}ひ^ひて^て曰^いく
許^あ若^{じやく}氣^き力^{りき}を費^{つひ}し^しる^るを^を通^{とほ}る^るを^を得^えべ^べら^らぬ^ぬも^も唯^{ただ}食^{じき}を^を嘗^あむ^むべ^べき^き人^{ひと}あり
む^む衆^{しゆ}個^この老^{らう}者^{じゆ}且^{かつ}之^しを^を聞^き我^{われ}們^{めん}既^{すで}小^こ大^{だい}思^しを^を蒙^{もう}る^る奈^な何^{なに}程^{ほど}の^の日^{にち}数^{すう}を^を問^とど
す^すの^のか^かの^の我^{われ}們^{めん}食^{じき}を^を辨^{べん}じ^じべ^べ何^{なに}を^を食^{じき}を^を嘗^あむ^むむ^む人^{ひと}と^と曰^いふ^ふ行^{ぎやう}者^{じや}曰^いく
く^く然^{しか}あ^ある^るを^を汝^{なんぢ}小^こ許^{しよ}多^たの^の乾^{かん}飯^{はん}又^{また}之^し餅^{ひやう}饅^{まう}頭^{とう}の^の類^{るい}を^を備^{そな}へ^へま^まる^る復^{また}昔^{むかし}長^{なが}
き^き和^わ尚^{じやう}と^と且^{かつ}早^{はや}く^く彼^あれ^れ小^こ與^よへ^へく^く大^{だい}き^きる^る猪^ぶと^と此^この^の道^{だう}を^を問^とふ^ふ人^{ひと}八^{はち}戒^{がい}

我^{われ}猪^ぶと^とる^るも^も又^{また}容^{よう}易^いと^と雖^いも^も腹^{はら}肥^あち^ち大^{だい}に^にて^て食^{じき}を^を費^{つひ}ん^ん若^しら^らぬ^ぬの^のを
喰^くて^て飽^あ満^{まん}る^るを^を管^{くだん}事^じと^と齋^{さい}人^{にん}衆^{しゆ}個^この老^{らう}人^{にん}最^{さい}安^{あん}き^き受^うり^りと^とて^て追^おひ^ひて^て
を^をま^まり^りせ^せ個^こ々^々談^{だん}合^{ごう}て^て許^{しよ}若^{じやく}の^の食^{じき}を^を贈^くり^りま^まる^るら^らむ^むを^を八^{はち}戒^{がい}大^{だい}の^の小^{せう}慍^{いん}喜^ぎ
て^て身^みを^を変^{へん}じ^じて^て巨^{きゆう}大^{だい}と^とる^る猪^ぶと^とる^る頭^{あたま}の^の其^{その}の^の尾^び小^{せう}到^{たう}り^りて^て長^{なが}き^き車^{くるま}百^{ひやく}餘^{じゆ}
丈^{ぢゆう}蹄^{てい}より^{より}背^せ小^{せう}到^{たう}り^りて^ての^の高^{かう}き^き支^し千^{せん}尺^{じやく}余^{じゆ}の^の一^{いつ}莊^{じやう}許^{しよ}若^{じやく}の^の人^{ひと}々^々食^{じき}を^を送^{おく}り^り
ま^まる^る支^し其^{その}の^の数^{すう}を^を計^{けい}し^して^て恰^あら^ら山^{さん}の^の如^{ごと}く^く小^{せう}積^{じき}上^{じやう}る^るを^を八^{はち}戒^{がい}是^ぜを^を残^{のこ}す^す
る^る喰^くひ^ひ尺^{じやく}二^に上^{じやう}小^{せう}進^{しん}んで^で路^ろを^を問^とく^く一^{いつ}息^{いき}小^{せう}五^ご丁^{てい}八^{はち}丁^{てい}ツ^つの^の土^{つち}を^を捨^すて^て
る^る許^{しよ}多^たの^の人^{ひと}歩^ふを^を起^おして^て駈^かり^りて^て食^{じき}を^を送^{おく}る^る支^し絶^{たつ}間^{かん}々^々八^{はち}戒^{がい}亦^{また}力^{りき}を^を尽^{つく}
く^く終^{まつ}夜^や道^{だう}を^を問^とく^く行^{ぎやう}者^{じや}の^の師^し父^ふを^を助^{たす}け^け汝^{なんぢ}僧^{そう}の^の行^{ぎやう}囊^{ぶくろ}を^を擔^かひ^ひ迹^{あと}小^{せう}續^{じき}い^い
て^て進^{しん}む^むく^く終^{まつ}ふ^ふ三^{さん}昼^{ちゆう}夜^や中^{ちゆう}に^に七^{しち}絶^{たつ}山^{さん}を^を通^{とほ}り^り越^こし^し師^し徒^と四^し人^{にん}老^{らう}者^{じゆ}ど^{ども}も
小^{せう}別^{べつ}を^を告^こ急^{きふ}し^して^て西^{さい}方^{ほう}へ^へ進^{しん}む^むの^のか

西行法師傳卷之六

朱紫國唐僧論前世 孫行者施為三折肱

つれなきひきき 月往日まゐりて又夏の炎天ふ到り三藏師徒四人一構の城下ふ到る城
 の上ふ黄うるは法を建て朱紫國と記し三藏の曰く此處極めて
 一國の王城うらん城ふ入て関文を換べとて城門ふ進を街を過
 會同館ふ到る館を預る大使出迎へ仔細を問三藏合掌して貧僧
 る東土大唐より西天ふ赴き仏祖を拜し経を求るの僧うの今大唐
 小来して関文を換へんを願ふ大人より國王小奉りありり
 大使礼を施し旦先爰めて歌をうんと四人を館中ふ招り入諾多の官
 人ふ命と命を請へく種々と接待其後大使三藏を伴ひ國王の言中
 小到り始終を仔細奉りたるを國王惟喜で朕今身小病有ふ依
 久々朝ふ臨ざる處當下遠く唐僧のまあるを誠小我惟喜言り

直小三藏を殿上ふ召て座を給ふ三藏國王小礼拜し関文を捧々
 を國王是を披き見終りて曰く汝が大唐の今許の世を受君臣正
 しく明うのや唐王何ふより死て又獲生此大難を起し汝小命を
 佛を拜し経を求りあると三藏曰く我本國を往昔三皇世を治む
 といのり大日如来帝黄帝是より又五帝嗣で世を治む少日天顛頂帝響
 堯舜次ふ三王より禹湯武此三皇五帝三王何れも聖明ゆて天
 下養平ありと終ふ七雄覇を争ふ小到り六國秦の爲ふ并吞
 せらむと久くむとて天下漢の高祖小歸其後晋の司馬氏國家を
 保ち宋齊梁陳隋の五代を経て四代皆我唐朝小帰依り方國靜謐
 四民安樂あり我太宗白皇帝大徳寛仁ゆて堯舜の風あり今貧僧小
 命とて仏を拜し経を求りも謂はる斯様うやうの仔細ありとて竜

神雨を過りて天の罪を受唐王小救ひを求むと魏徴夢小竜を斬彼
竜崇りのまろく唐王具途小赴く死崔班判官小魏徴書を贈り再
び獲生て陽門小返りぬひ水陸大會をさうく函冥小謝しぬひ一時
観音菩薩出現ありて大衆の妙経西方小有事を示しぬ此故小
貧道勅命を蒙りて西方小来りてさうくと仔細小是を語りぬ國
王聞て昏歎し寔小天朝大國の風君正しく臣賢なり我今久く瘡有
と雖も是を救ひ助んと思ふ臣下一人も有まらぬ三藏是を聞て國王
の相貌と見奉らる小形容兼心神脱り其病根を尋糸せんと思ふ
死小光祿寺の官人唐僧小斎を宿んと宣示しさうぬと國王三藏を請
ふて相伴し山海の珍羞を備へ心をさうく接待する却説行者が輩
三箇の會同館小在て歇しぬさうく悟淨の飯を調へて菜を煮とく

て塩醬油酢のきまを一つ行者八戒小向ひ你街小行て買まると云
ども八戒餘嫌めて動うは行者準と欺んと思ひ謂て曰く彼街小
焼餅饅頭羊羹破擗餅油食蜜食其外上吉き物許若ありしを見
さうや然らば吾行て是を買と人の思ふ依小貴用さるると器を取て立
上む八戒口小涎をさうく奇々我小你と俱小行て彼品々を賞用せ
ん二箇寺連立て出行らる程さうく鼓樓の下小致さる小限らる
人群集して押合揉合とめさうくふど八戒是を見て我小行能を
彼群集の輩我小醜き形を見を極めて怖さる逃まると或の倒轉
び又の踏殺らるる爲ま有た却て我小を担て償命とせんと云べし不可
行々々と云て動さるる行者笑ひて然あるを汝の愛小止りて待べし
我行て物を買まんと云捨るまの行群集の中小分入何まやと見

を見つゝ此處より一張の皇捧を張りて有一邊より十一人の大監校尉を
守りて並居りて行者近侍て是を讀其文曰

朱紫國王諭自立朕業以來四方平服近頃國事不祥

沉病伏枕淹延日久難痊本國大醫院未能調治今此

出榜文普招天下賢士若有精醫者請登寶殿療理朕

躬捐得疾痊願將社稷平分决不虛示為狀出給張掛

頒至榜者

行者覽畢て満心歡喜我今醫生ころて慰へと思ひ翼の方小向ひて
一口の氣と噴出し々々乍ち一陣の旋風と起り石を走せ砂を飛り
程小群集の人々驚き騒ぎ四方に散乱て逃去り行者の隱身の法を遣
ひ彼榜文を引掲げて立歸りて戒を站り死に到りたり只見那獸子面

と垣根小押當睜り居り行者密ふの榜文を讀み八戒が懐裡小
押入其終小捨置て独會同館小ぬりたり斯く自皇榜を守り處の大
監校尉七時眼を塞で有りつゝ風靜りて後頭を牽て見る處小彼皇
榜を失ひり官人ども大に驚き儲の當下の旋風小吹去りと皆え
疾尋ひて爰彼死搜り求る處小八戒が懐中より彼榜文半が出
て有りつゝを見付官人ども立かると能々伺ひ看み彼皇榜文小疑ひ
一頓て八戒を喚覚し汝皇榜を掲げ持りて定て医術小考つる者
るらん趁早萬歳へ奏聞せん此方へ来るべしと引立ち八戒の官人ども
を見て大に小驚り地上下跪下倒れ我那ぞ医術を知んや日皇
榜を掲げつゝ官人の曰く汝懐中より死の者皇榜小あり
や八戒頭を低て懐中を見しを誠小一紙の紙有押附き是を讀

朱紫國八戒
官人被圍繞



會本西遊記三回八



會本西遊記三回八

ち牙と咬で誓つて備の彼潘猴我を害する事斯の如く我以撈を取て
怎麼とまらべきやと扯破んと為處を官人們架住の是の當今國王の
出する處の皇榜あり誰ら扯破るをまらべきや汝既此是を情中
まらるるの言は能療治まらるる疾くまつて皇帝の病を看よ八戒
が曰く是の我掲まる宛ふ非は我師兄孫悟空と云る者取まる宛る
つて官人聞て你乱語を云のる既ふ皇榜は懐裡に有上り當
下皇帝の尊前ふ連行とも我々が誤りたるは汝速うふまらぶと
扯立行人とまらぬども八戒大路ふ立定つて根の生るる如く更ふ動る
む衆位の官人とも圍繞て只管ふ連行んとて争ひ騒動しるる
此時兩個の年老るる太監進出て八戒に向ひて云やう你が相貌此
國の人ふ非は音も又別なり我獨ふ東土よりまら一個の和尚在

朝門ふ入を見らるる彼の彼和尚の徒争らるるや八戒関て笑ふ甚如く我
師父朝ふ到りて関文を換んとは我師兄の會同館ふ歌と居り彼
太監衆位の官人ふ向ひ你們渠と俱ふ會同館ふ到るるを其端的
を知まらるる争ふ正の不要なりとて住めを充つて官人ども八
戒と打連立會同館ふど到りる此時行者の御向ふ會同館ふ入り
悟淨ふ向ひ皇榜を掲て八戒が懐中へ入置し書を語り兩人手を拍
て笑ひ居とらるる八戒の衆位の官人どもと打連て入まり行者を見
て大ふ乱嚷て曰く師兄你我敷き街の連行皇榜を掲てきて我ふ
難為とさせのり奈何行者笑て敢て答は衆位の大監校尉行者を見
え一同ふ拜して曰く孫老翁我國王縁有て今日天子より長老を降し
ふ極て医術の手徴あらん疾々三折肱と施して我國王の病を愈し

ゆひのちを天下と分ちて徳を興へば行者が曰く我医術の手微有を
以て帝王の病を治さば思ひ皇榜を掲て我師を授け置候
を爰まで道引しめり若帝王親ら爰来りて我を請待さるるを
手の到る處管は病を除く大監是を聞て校尉亦を館中へ残し置
早飯つて朝ふ入て帝王小見え此を仔細お養聞は国王是を聞て
大お歡喜三藏お向ひ聖僧幾位の高徒ありて那れの一は善医を
おゆや三藏の曰く貧僧二人の徒有りて雖も偶お是山野の庸才一
個も医をさるは者なく国王聞て聖僧管は太謙しゆか爰るうはと
又文武の衆官を召て曰く寡人親ら彼如ふ到り唐僧の高才を請待
せんと思へる病有ふよりて唐僧の乗支能む餘寺一個も残は會同
館にお到り尊長老を請来り朕が病を看はば候候神僧長老は曰く

へを君臣の礼を以て相見え管は思疎ふまゝに衆臣命を以て
大監と偶お打連會同館にお到り行者お見え拜するは行者當中お
座て端然として動がは衆臣謹て曰く國王病お依て親ら長老と
迎ら支能むは臣亦とて神僧を請待せむ万望の朝お入ると至
上の病を療治しめり行者聞て既如此列位前行しめり我俱お陪ひ
行んと衣を敷立出せ百官前行して頃刻朝中にお到り國王お養
しゆは國王尊を薦を捲せて行者が相貌を見より大お驚き怖し
戦々兢々竜床の上にお倒せしめり許多の女官跪得やめ死後
お助け入奉る國王近士の人々を召て彼和尚疾く斂むは我斯る
怖き者お念慮近くばらんや近士の人々此故を行者お告る行
者曰若我形容を怖しめり我糸をわけて診服せん近士の官人又

此由を國王ここのう王おうふ養やうと國王ここのう王おう是これを向まむて大おほ歡よろこ喜び然しからば其その如ごとくして疾と疾と我われ病びやうを看みよ近きん士しの人ひと々ごと々ごと行者ぎやうを宮みや中ちゆうふ招まねきさるるが行者ぎやう者もの則すなはち宝たから殿だんふ登のぼる三さん藏ざう行者ぎやう者ものを叱ちかて曰いはく汝なんぢ隆たか根ね我われふ又また難がた為しとさせんとせしむや
你なんぢ我われふ從したがひてよろよろ以もつ来くるあが二に度ども医いを為なし竟まと見みむ況いはや診しん脈みやくふ疾とてををや行者ぎやう者もの笑わらて曰いはく師し父ふ敢あて知しるるは我われ種しゆ々の藥やく法ぽうありて專まら大おほ病びやうを痊なむべし亦また絲いとをわけて診しん脈みやくする病びやう根ね知しると云いふ竟まと云いつて手てを延のべし毫こ毛もうを抜ぬき三さん條じょうの金きん線せんと変かへし何なにをも其その長なが二に丈じゆ四し尺ふく二に寸すん四し氣きを象さうとし是これを取とり三さん藏ざうふ見みせしめ音ねを煩わづ意いしゆしゆの事ことて終つひふ後のち言いふを進すすむる

油漬

繪本西遊記三編卷之六 子

東京 徳田屋 藏書

書本
西遊全傳 卷之六

書

家再拜

